

三右衛門の罪

芥川龍之介

青空文庫

文政四年の師走である。加賀の宰相治修の家来に知行六百石の馬廻り役を勤める細井三右衛門と云う侍は相役衣笠太兵衛の次男数馬と云う若者を打ち果した。それも果し合いをしたのではない。ある夜の戌の上刻頃、数馬は南の馬場の下に、謡の会から帰つて来る三右衛門を闇打ちに打ち果そうとし、反つて三右衛門に斬り伏せられたのである。

この始末を聞いた治修は三右衛門を目通りへ召すように命じた。命じたのは必ずしも偶然ではない。第一に治修は聡明の主である。聡明の主だけに何ごとによらず、家来任せといふことをしない。みずからある判断を下し、みずからその実行を命じな

いうちは心を安んじないと云う風である。治修はある時二人の鷹た
かじよう匠しやうにそれぞれみずから賞しょう罰ばつを与えた。これは治修の事を
 処する面目めんもくの一端を語っているから、大略しよを下しもに抜き書して見
 よう。

「ある時石川郡市川村の青田あおたへ丹頂たんちやうの鶴群むぐだれ下れるよ
おとりみやくし、御鳥見役おたかべやより御鷹部屋ごへ御注進わかどしよりになり、若年寄わかどしよりより直接言ご
んじよう上うえさまに及びければ、上様ごまんえつには御満悦おほしめに思召おぼしめされ、翌朝う卯
こくおともぞろの刻御供揃おない相済み、市川村へ御成たかりあり。鷹たかには公儀より御
ふじづかさ拝領だいいちもつの富士司の大逸物おおたかにきはやぶさを始め、大鷹たか二基たずさ、二基たずさを撃えさ
 せ給う。富士司の御鷹匠あいもときぎやえもんは相本喜左衛門と云うものなりしが、其
 日は上様御自身あまあがに富士司を合さんとし給うに、雨上あまあがりの畦道あぜみち

のことなれば、思わず御足おんあしもとの狂いしとたん、御鷹おたかはそれ
 空中に飛び揚り、丹頂にわも俄かに飛び去りぬ。この様さまを見たる喜左
 衛門いちじは一時の怒に我を忘れ、この野郎やろう、何をしやがったと罵りけ
 るが、たちまち御前ごぜんなりしに心づき、冷汗れいかん背せを沾うるおすと共に、蹲そ
んきよ 踞ましてお手打ちを待ち居りしに、上様には大きに笑わせられ、
 予あやまりの誤あやまりじや、ゆるせと御意ぎよあり。なお喜左衛門の忠ちゆう直うちよくなるに
 感じ給い、御帰城のちの後は新地しんち百石ひゃつこくに御召し出しの上、組外くみはず
 れに御差おさ加しくわえに相成り、御鷹部屋おたかべや御用掛ごようがかりに被成なされ給いしとぞ。
 「その後富士司の御鷹は柳瀬清八やなせせいはちの掛りとなりしに、一時病やみ
 鳥となりしことあり。ある日上様清八を召され、富士司の病やまいはと
 被おお仰おせし時られ、すでに快癒のちの後のちなりしかば、すきと全治ぜんじ、ただい

までは人をも把り兼ねませぬと申し上げし所、清八の利口をや憎

ませ給いけん、夫は一段、さらば人を把らせて見よと御意あり。

清八は爾来やむを得ず、己が息子清太郎の天額にたたき餌小

ごめ餌などを載せ置き、朝夕富士司を合せければ、鷹も次第に

人の天額へ舞い下る事を覚えこみぬ。清八は取り敢ず御鷹匠小

頭より、人を把るよしを言上しけるに、そは面白からん、

明日南の馬場へ赴き、茶坊主大場重玄を把らせて見よと

御沙汰あり。辰の刻頃より馬場へ出御、大場重玄をまん中に

立たせ、清八、鷹をと御意ありしかば、清八はここぞと富士司を

放つに、鷹はたちまち真一文字に重玄の天額をかい掴みぬ。清八

は得たりと勇みをなしつつ、園揚げ(園トハ鳥ノ肝ヲ云)の小刀

を隻手せきしゆに引抜き、重玄を刺さんと飛びかかりしに、上様うえさまには
 柳瀬やなせ、何をすると御意ぎよいあり。清八はこの御意をも恐れず、御鷹おたかの
 獲物はかかり次第、鬮まるを揚げねばなりませぬと、なおも重玄を刺さ
 さんとせし所へ、上様にはたちまち震怒しんどし給い、筒つつを持って御意
 あるや否や、日頃御鍛錬ごたんれんの御手銃おてづつにて、即座に清八を射殺し給
 う。」

第二に治修はるながは三右衛門さんえもんへ、ふだんから特に目をかけている。
 嘗乱心者かつらんしんものを取り抑えた際に、三右衛門ほか一人の侍ひとりさむらいは二人とも
 額に傷を受けた。しかも一人は眉間みけんのあたりを、三右衛門は左の
 横鬢よこびんを紫色に腫れ上あがらせたのである。治修はこの二人を召し、
 神妙の至りと云う褒美ほうびを与えた。それから「どうじゃ、痛むか？」

と尋ねた。すると一人は「難^{ありがた}有^がい仕合せ、幸い傷は痛みませぬ」と答えた。が、三右衛門は苦^{にが}にがしそうに、「かほどの傷も痛みなければ、活^いきているとは申されませぬ」と答えた。爾^{じらい}来^{らい}治修は三右衛門を正直者だと思つてゐる。あの男はとにかく巧^{こうげん}言^{げん}は云わぬ、頼^{たの}もしいやつだと思つてゐる。

こう云う治修は今度のことも、自身こう云う三右衛門に仔^し細^{さい}を尋ねて見るよりほかに近^{ちかみち}途^ちはないと信じていた。

仰^{こうむ}せを蒙^{もう}つた三右衛門は恐^{おそ}る恐^{おそ}る御^ご前^{ぜん}へ伺^{しんこう}候^{こう}した。しかし悪^{あく}びれた気^け色^{しき}などは見えない。色の浅^あ黒^{くろ}い、筋^す肉^{にく}の引^ひき緊^{しま}つた、多少^{たうしやう}疝^{かん}癰^{びき}のあるらしい顔には決心の影^{かげ}さえ仄^ほめいてゐる。治修はま^まずこう尋^{たず}ねた。

「三右衛門、数馬かずまはそちに闇打ちをしかけたそうじやな。すると何かそちに対し、意趣いしゆを含んで居つたものと見える。何に意趣を含んだのじや？」

「何に意趣を含みましたか、しかとしたことはわかりませぬ。」
治修はちよいと考えた後のち、念を押すように尋ね直した。

「何もそちには覚えはないか？」

「覚えと申すほどのことはございませぬ。しかしあるいはああ云うことを怨うらまれたかと思うことはございします。」

「何じや、それは？」

「四日ほど前のことでございします。御指南番ごしなんばん 山本小左衛門殿やまもとこざえもんのの道場に納のうかい会の試合がございました。その節わたくしは小左衛

門殿の代りに行司ぎょうじの役を勤めました。もつとも目録もくろく以下のものの勝負だけを見届けたのでございます。数馬の試合を致した時にも、行司はやはりわたくしでございました。」

「数馬の相手は誰がなつたな？」

「おそばやくひらたきだいふどの御側役平田喜太夫殿の総領そうりよう、多門たもんと申すものでございま

した。」

「その試合に数馬かずまは負けたのじやな？」

「さようでございます。多門たもんは小手こてを一本に面めんを二本とりました。数馬は一本もとらずにしまいました。つまり三本勝負の上には見苦みぐるしい負けかたを致したのでございます。それゆえあるいは行司ぎょうじのわたくしに意趣を含んだかもわかりませぬ。」

「すると数馬はそちの行司に依怙えこがあると思うたのじやな？」

「さようでございます。わたくしは依怙は致しませぬ。依怙を致す訣わけもございませぬ。しかし数馬は依怙のあるように疑つたかとも思いまする。」

「日頃はどうじゃ？ そちは何か数馬を相手に口論でも致した覚えはないか？」

「口論などを致したことはございませぬ。ただ………」

三右衛門はちよつと云いよど澀んだ。もつとも云おうか云うまいかとためらっている気色けしきとは見えない。——いちおう応云うことの順序か何か考えているらしい面持ちおももである。治修はるながは顔がんしよく色を和やわらげたまま、静かに三右衛門の話し出すのを待った。三右衛門は間まもなく

話し出した。

「ただこう云うことがございました。試合の前日でございました。数馬は突然わたくしに先刻の無礼を詫わびました。しかし先刻の無礼と申すのは一体何のことなのか、とんとわからぬのでございませぬ。また何かと尋ねて見ても、数馬は苦笑にがわらいを致すよりほかに返事を致さぬのでございます。わたくしはやむを得ませぬゆえ、無礼をされた覚えもなければ詫わびられる覚えもなおさらないと、こう数馬に答えました。すると数馬も得とく心しんしたように、では思違あやまりだつたかも知れぬ、どうか心にかけれられぬ様にと、今度は素直に申しました。その時はもう苦笑ほくそえいよりは北叟ほくそえ笑んでいたことも覚えて居ります。」「

「何をまた数馬は思い違えたのじゃ？」

「それはわたくしにもわかり兼ねます。が、いずれ取るにも足らぬ些細ささいのことだったのでございましょう。——そのほかは何もございませぬ。」

そこにまた短い沈黙があつた。

「ではどうじゃな、数馬の気質は？　疑い深いとても思つたことはないか？」

「疑い深い気質とは思ひませぬ。どちらかと申せば若者らしい、何ごとも色に露あらわすのを恥じぬ、——その代りに多少激し易い気質だつたかと思ひます。」

三右衛門はちよつと言葉を切り、さらに言葉をと云うよりは、

吐息といきをするようにつけ加えた。

「その上あの多門との試合は大事の試合でございました。」

「大事の試合とはどう云う訣わけじや？」

「数馬は切り紙きでござりまする。しかしあの試合に勝って居りましたら、目錄さざかを授さづつたはずでございまする。もつともこれは多門にもせよ、同じ羽目はめになつて居りました。数馬と多門とは同門のうちでも、ちようど腕前の伯仲はくちゆうした相弟子あいでしだったのでござい
まする。」

治修はるながはしばらく黙つたなり、何か考えているらしかった。が、急に気を変えたように、今度は三右衛門の数馬かずまを殺した当夜のこ
とへ問を移した。

「数馬は確かに馬場の下にそちを待っていたのじゃな？」

「多分はさようかと思えます。その夜は急に雪になりましたゆえ、わたくしは傘をかざしながら、御馬場の下を通りかかりました。ちようどまた伴もつれず、雨着もつけずに参ったのでございませう。すると風音の高まるが早い、左から雪がしまいで参りました。わたくしは咄嗟に半開きの傘を斜めに左へ廻しました。数馬はその途端に斬りこみましたゆえ、わたくしへは手傷も負わずに傘ばかり斬ったのでございませう。」

「声もかけずに斬って参ったか？」

「かけなかつたように思えます。」

「その時には相手を何と思つた？」

「何と思う余裕よゆうもござりませぬ。わたくしは傘を斬られると同時に、思わず右へ飛びすさりしました。足駄あしだももうその時には脱ぬいで居ったようございます。と、二にの太刀たちが参りました。二の太刀はわたくしの羽織の袖そでを五寸ばかり斬り裂きました。わたくしはまた飛びすさりながら、抜き打ちに相手を払いました。数馬の脾腹ひばらを斬られたのはこの刹那せつなだったと思います。相手は何か申しました。……………」

「何かとは？」

「何と申したかはわかりませぬ。ただ何か烈しい中に声を出したのでございます。わたくしはその時にはつきりと数馬だなど思いました。」

「それは何か申した声に聞き覚えがあつたと申すのじやな？」

「いえ、左様ではございませぬ。」

「ではなぜ数馬と悟つたのじや？」

治修はじつと三右衛門を眺めた。三右衛門は何とも答えずにいる。治修はもう一度促すように、同じ言葉を繰り返した。が、今度も三右衛門は袴へ目を落したきり、容易に口を開こうともしない。

「三右衛門、なぜじや？」

治修はいつか別人のように、威厳のある態度に変わっていた。この態度を急変するのは治修の慣用手段の一つである。三右衛門はやはり目を伏せたまま、やっと噤んでいた口を開いた。しか

しその口を洩れた言葉は「なぜ」に対する答ではない。意外にも甚だしょうぜん悄然とした、罪を謝する言葉である。

「あたら御役に立つ侍を一人、刀の錆さびに致したのは三右衛門の罪でございまする。」

治修はるながはちよつと眉まゆをひそめた。が、目は不相あいかわらばあごそ変ま巖いかに三右

衛門の顔に注がれている。三右衛門はさらに言葉を続けた。

「数馬かずまの意趣いしゆを含んだのはもつとも次第しだいでございまする。わたくしは行司ぎようじを勤めた時に、依怙えこの振舞ふるまいを致しました。」

治修はいよいよ眉をひそめた。

「そちは最前さいぜんは依怙は致さぬ、致す訣わけもないと申したようじやが、……」

「そのことは今も変りませぬ。」

三右衛門は一ひとこと言ことずつ考えながら、述じゆつかい懐かいするように話し続けた。

「わたくしの依怙いごと申すのはそう云うことではございませぬ。こ
とさらに数馬を負かしたいとか、多門たもんを勝たせたいとかと思わな
かったことは申し上げた通りでございませぬ。しかし何もそれば
かりでは、依怙いごがなかつたとは申されませぬ。わたくしは一体多
門よりも数馬に望みしよくを嘱しよくして居りました。多門の芸はこせついで
居ります。いかに卑怯ひきようなことをしても、ただ勝ちさえ致せば
好よいと、勝負ばかり心がける邪道じゃどうの芸でございませぬ。数馬の
芸はそのように卑いやしいものではございませぬ。どこまでも真まとも

に敵を迎える正道せいどうの芸でございませぬ。わたくしはもう二三年致せば、多門はどうてい数馬の上じょうたつ達だつに及ぶまいとさえ思つて居りました。……」

「その数馬をなぜ負かしたのじゃ？」

「さあ、そこでございませぬ。わたくしは確かに多門よりも数馬を勝たしたいと思つて居りました。しかしわたくしは行司でございませぬ。行司はたといかなる時にも、私曲しきよくを抛なげたねばなりませぬ。一たび二人ふたりの竹刀しなの間あいだへ、扇おうぎを持つて立つた上は、天道に従わねばなりませぬ。わたくしはこう思いましたゆえ、多門と数馬との立ち合う時にも公平ばかりを心がけました。けれどもただいま申し上げた通り、わたくしは数馬に勝たせたいと思つて居い

るのでございます。云わばわたくしの心の秤はかりは数馬に傾いて居るのでございます。わたくしはこの心の秤はかりを平たいらに致したい一心から、自然と多門の皿の上へ錘おもりを加えることになりました。しかも後のちに考えれば、加え過ぎたのでございます。多門には寛かんに失した代りに、数馬には厳に過ぎたのでございます。」

三右衛門はまた言葉を切った。が、治修は默然もくねんと耳を傾けているばかりだった。

「二人は正眼せいがんに構えたまま、どちらからも最初にしかけずに居りました。その内に多門は隙すきを見たのか、数馬の面めんを取ろうと致しました。しかし数馬は気合あざやいをかけながら、鮮あざやかにそれを切り返しました。同時にまた多門の小手こてを打ちました。わたくしの依

怙の致しはじめはこの刹那せつなでございませぬ。わたくしは確かにその一本は数馬の勝だと思ひました。が、勝だと思ふや否や、いや、竹刀の当りかたは弱かつたかも知れぬと思ひました。この二度目の考えはわたくしの決断けつだんを鈍にぶらせました。わたくしはどうとう数馬の上へ、当然挙げるはずの扇を挙げずにしまつたのでございませぬ。二人はまたしばらくの間あいだ、正眼せいがんの睨み合にらひを続けて居りました。すると今度は数馬かずまから多門たもんの小手こてへしかけました。多門はその竹刀しなひを払いぎまに、数馬の小手へはいりました。この多門の取つた小手は数馬の取つたのに比べますと、弱かつたようでございませぬ。少くとも数馬の取つたよりも見事だつたとは申されませぬ。しかしわたくしはその途端とたんに多門へ扇を挙げてしまひ

ました。つまり最初の一本の勝は多門のものになったのでござい
ます。わたくしはしまつたと思ひました。が、そう思う心の裏
には、いや、行司ぎょうじは誤つては居らぬ、誤つて居ると思ふのは数
馬えこに依怙えこのあるためだぞと囁くささやものがあるのをごぞいします。：
……」

「それからいかが致した？」

治修はるながはやや苦にがにがしげに、不相あいかわらず変ちよつと口を噤つぶんだ三右
衛門さいそくの話を催促した。

「二人はまたもとのように、竹刀の先をすり合せました。一番長
い気合きあいのかけ合ひはこの時だつたかと覚えて居ります。しかし
数馬は相手の竹刀へ竹刀を触ふれたと思ふが早い、いきなり突つきを

入れました。突はしたたかにはいりました。が、同時に多門の竹刀も数馬の面めんを打ったのでございます。わたくしは相打ちあいうを伝えるために、まっ直に扇を挙げて居りました。しかしその時も相打ちではなかったのかもわかりませぬ。あるいは先後せんごを定めるのに迷って居ったのかもわかりませぬ。いや、突のはいつたのは面に竹刀を受けるよりも先だったかもわかりませぬ。けれどもとにかく相打ちをした二人は四度目の睨み合いへはいました。すると今度もしかけたのは数馬からでございました。数馬はもう一度突を入れました。が、この時の数馬の竹刀は心もち先あがが上つて居りました。多門はその竹刀の下を胴どうへ打ちこもうと致しました。それからかれこれ十合じゅうごうばかりは互しに鍔ぎを削けずりました。しかし最後

に入り身になった多門は数馬の面へ打ちこみました。……」

「その面は？」

「その面は見事にとられました。これだけは誰の目にも疑いのない多門の勝でございます。数馬はこの面を取られた後、のちだんだんあせりはじめました。わたくしはあせるのを見るにつけても、今度こそはぜひとも数馬へ扇を挙げたいと思いました。しかしそう思えば思うほど、実は扇を挙げることをためらうようになるのでございます。二人は今度もしばらくののち後、七八ごう合ばかり打ち合いました。その内に数馬はどう思ったか、多門へたいあた体当りを試みました。どう思ったかと申しますのは日頃ひごろ数馬は体当りなどは決して致さぬゆえでございます。わたくしははっと思えました。

またはつと思つたのも当然のことでもございました。多門は体たいを開いたと思うと、見事にもう一度面を取りました。この最後の勝負ほど、呆気あっけなかつたものはございませぬ。わたくしはどうとう三度とも多門へ扇を挙げてしまいました。——わたくしの依怙いこと申すのはこう云うことでございませぬ。これは心の秤ばかりから見れば、云わば一毫いちごうを加えたほどの吊合つりあいの狂いかもわかりませぬ。けれども数馬かずまはこの依怙いこのために大事の試合を仕損しそんじました。わたくしは数馬かずまの怨うらんだのも、今はどうやら不思議のない成行なりゆきだつたように思つて居ります。」「

「じゃがそちの斬り払つた時に数馬と申すことを悟さとつたのは？」
「それははつきりとはわかりませぬ。しかし今考えますると、わ

たくしはどこか心の底に数馬に済まぬと申す気もちを持って居ったかとも思います。それゆえたちまち狼藉者ろうぜきものを数馬と悟ったかとも思います。」

「するとそちは数馬の最後を気の毒に思うて居るのじやな？」

「さようでございます。且かつはまた先せんこく刻も申した通り、一かどの御用も勤まる侍にむざと命を殞おとさせたのは、何よりも上かみへ対し奉り、申し訣わけのないことと思つて居ります。」

語り終つた三右衛門はいまさらのように頭かしらを垂れた。額ひたいには師走わすの寒さと云うのに汗さえかすかに光っている。いつか機嫌きげんを直した治修はるながは大様おおように何度も領うなずいて見せた。

「好よい。好い。そちの心底はわかつている。そちのしたことは悪

いことかも知れぬ。しかしそれも詮せんないことじや。ただこの後のちは

――

治修は言葉を終らずに、ちらりと三右衛門さんえもんの顔を眺めた。

「そちは一太刀ひとたち打つた時に、数馬と申すことを知つたのじやな。ではなぜ打ち果すのを控ひかえなかつたのじや？」

三右衛門は治修にこう問われると、昂こうぜん然と浅黒い顔を起した。その目にはまた前にあつた、不敵な赫かがやきも宿っている。

「それは打ち果さずには置かれませぬ。三右衛門は御家来ではございます。とは云えまた侍でもございます。数馬を氣の毒に思ひましても、狼藉者は氣の毒には思ひませぬ。」

(大正十二年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三右衛門の罪

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>